

あーしさんは歩き出す

猫好き系女子

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あーしさん、大学3年生。

どこかむなしい毎日を送っていた彼女は、特に親しくもない友人に合コンに誘われる。断りきれずにしぶしぶ参加した合コンで、あーしさんは意外な人物と再会する。

みたいな話です。pixivにもあげております。

文章拙いですが、よければどうぞ！

目次

あーしさん、歩き出す。

61

あーしさん、出会う | 1

あーしさん、気付く | 7

あーしさん、偶然とは恐ろしきかな

13

あーしさん、もやつとする? | 20

あーしさん、癒される | 27

あーしさん、一念発起? | 35

あーしさん、ガハマさん、愚腐腐さん

42

あーしさん、自覚しちゃう! | 48

番外編：あの日あの時あの場所で

57

あーしさん、出会う

ずっと、これが恋だと思っていた。

クラス、いや、学年中から学校中から一目置かれる存在への憧れ。彼はいつも優しく、心配りが出来て、見目もいい。勉強も運動もできる、まさに完璧な人だった。

いつからだろう、私は彼の特別ではないと気付いたのだ。

いや、私は彼にとってはそれなりに重要な立ち位置にいたのかもしれない。今となつてはそれもわからないことだが。

私に向けられる優しい瞳は、名前も知らない有象無象にも向けられていると知った。

私にかけられる優しい言葉は使い古され味の出てきた古着みたいなものだった。

それに気付いたのは、なんと愚かしいことに卒業式の日。

別れを惜しみ、彼の特別になりたいと、二人きりの教室で告白し、無残に散ったときだった。

「あ？合コン？」

「そつそー！優美子、美人なのにフリーなんてもつたないじゃーん？」

たまにと思い学食に行くですぐこれだ。いつもは弁当を持っていくのだが……どれだけだるくても今度からは絶対に弁当を持っていこう、と決心した。

特にやりたいこともなく、なんとなく選んだ大学になんとなく進学した。高校時代の友人達はみな散り散りになり、しばらく連絡もとつていない。たまに結衣や海老名とご飯に行ったりはするけど、所詮はそのくらいだ。

高校の時はスクールカーストとやらに縛られていたが、大学ともなるとそんなことを考えるのが幼稚なように思えてくる。高校のときからは考えられないくらい友人の数は減った。これが大人になるってことなのかと、そう思えばこのつまらない日常もちよつとは輝いて見えるのかと期待したこともあった。特に変化はなかったが。

ともかくも、数少ない『友人』の頼みである。人間関係は希薄となったが、無下にするわけにも行かない。

「……わかった」

無遠慮な言葉をかけるこの派手な女を、早く追い払ってしまいたかった。まるでどこかのいつかの誰かを見ているようだから。

合コンはどうやら飲み屋で行われるらしい。久しぶりの繁華街にめまいのような感覚を覚える。

「どもー、〇〇大学の3年、……です!」

「同じく、三浦優美子です」

同級生の見覚えのある、これまた派手な女ばかり集まっていた。

「みんな綺麗だねー、こりや楽しみだわ! あ、俺らは〇〇大学の……」
「あ、国立のー! 頭いいんですねー」

別に覚える必要も無いな、なんて。一口酒を煽るが、どうも酔えない。

4対4の合コンだと聞いていたが、相手はひとり足りないようで。

「あとー人はー?」

きやぴきやぴした声で早速相手方の中で一番の爽やか系イケメンに擦り寄っていた。彼はまんざらでもないらしく、鼻の下を伸ばしている。

「遅れてくるよー、ふつーにかっこいいヤツだから、安心して」
楽しみー、と女達のテンションがにわかにながった。

「ねーねー、優美子ちゃん」

馴れ馴れしく話しかけてきたと思えば、先程の爽やか系イケメンだった。明るい茶髪に、穏やかな空気。どれもこれも彼を彷彿とさせて、端的にいえばイライラする！

「……………なに」

隠そうともせずに冷たく言い放つと、彼は多分そういう扱いになれていないのだろう。口角を一瞬ひくつかせながらも、彼はめげなかった。その精神力は評価しよう。

「えーと…：そうだ、今度どっか遊び行かない?俺、優美子ちゃんみたいな子すげータイプなんだよね」

ちらりと横に並ぶ彼女達を見るが、他の男と会話を楽しんでいるようで、こちらに気づいた様子はない。

それを狙って話しかけてきているとすれば、なんともまあ見下げた男である。

「間に合ってるんで」

「彼氏いるの？」

「関係ないっしょ」

「いやいや、俺の今後のためにもさ」

なんで私がお前の今後のことを考えてやらなきゃいかんのだ。

(あしらうのもメンドイ)

帰る、と言いかけたその時だった。

「悪い、遅れた」

どこかで聞いたことのある声だった。それは高校時代、しかし何度も何度もというわけではない。この声の主は人前で喋るのを得意とするタイプではなかったように思う。けれど何故だか、こいつの言っていたことは不思議と鮮明に記憶に残っているのだ。猫背で、陰気で、ぼつちで、気持ち悪いけど、やる時はやるヤツ。

まさかヒキオと会うなんてね、と思っていたのだが。

黒の無地で纏められた服は細身の体によく似合っていた。背は高い。走ってきたのか少し汗ばんでいるのが、どことなく色気のある様子だ。首から上はひどく整った人形のような容貌である。冷たい雰囲気は、銀縁のメガネをかけているからというだけではなさそうだ。

「……なんだ、みんなして惚けた面して」

皮肉ったモノの言い方はまあ間違いないが比企谷八幡なのだが。

けれど待って。目の前のこの青年は、あれ？なんだかいろいろ違うような。

（え、比企谷？ヒキオ？だよな？）

じいーつと凝視していたら、彼もこちらに気付いたようで、

「な、み、みうりゃ!？」

焦って噛みまくり慌てふためく様子を見て確信した。

「………久し振りじゃん、ヒキオ」

どれだけ見た目が変わっても、この気持ち悪さは治らないのかとため息をついた。

あーしさん、気付く

「へえ、教育ね」

「なんだよ……意外か？」

「別に、あんたのことよく知らないし」

それもそうだな、と彼はぬるい水を一口含んだ。

彼は……比企谷は、どうやら教師を志しているらしい。実習に行くたび姿勢の悪さについて言及されるのと、本の読みすぎで目が悪くなり、黒板を見る時に「目が怖い」と大学の教師から涙ながらに言われたことが彼の見た目の大いなる変化の原因だそうだと、事実、大人びて文句のつけようのない容貌の彼に彼女達は目を奪われていた。

ほかの男達はそれが面白くないようで、「やっぱ比企谷連れてくんじゃなかつたわ」と次々ぼやいている。

「そういう三浦はどうなんだ」

「あーし？……どうなるんだろーね」

「まあお前ならなんとかなりそうだな」

「何だよそれ」

こんな男からとはいえ、しかも皮肉めいているとはいえ……なんだか嬉しかった。

私の未来は何も決まっていない。よくいえば白いキャンパスで、悪くいえばその見えない落とし穴。どちらかという落とし穴をのぞき込んでるような気持ちだ。暗くて何も見えない。

私は、何も変わっていない。

私と比企谷の間に居心地のいい沈黙が訪れると、また小うるさい爽やか系イケメン……名前なんだっけ……が割り込んできた。

「優美子ちゃんと比企谷って知り合いだったわけ？」

「おう。高校の時のな」

「へえ、トモダチってわけね」

比企谷が他人と流暢に会話しているのはひどく不気味な光景だった。彼からすれば心外であるのだろうが、彼の変化は見た目だけではなかったようだ。

爽やか系イケメンはなにか含みのある言い方であるが、これ以上絡まれるのは御免なので何も言わないでおこ……

「じゃあさ、優美子ちゃんのメアド、聞いてもいいよね？」

……う……

(だから合コンなんて嫌だったのに)

そろりと横の様子を伺うと、今度こそこちらに気付いていた彼女達はそれはそれは恐ろしい形相であった。

『突然現れたイケメン君(笑)と同級生で仲良さげでその上爽やか系イケメン(笑)にメアド聞かれてやがるこの女』

といったところか。このパターンは数度経験しているが、慣れないものだ。私には恋愛する気は無いというのに、彼女達にとってそこは重要でないらしい。

そんなことにも気付かず、目の前の憎らしい笑みをたたえた男は依然としてこちらを見つめてくる。そうすれば大抵の女は落ちてきたんだろうけど、私には無意味である。

あんたみたいなタイプがいるから、おちおち恋愛もしてもらえないんだから。

進歩のない世界にも周りにも、自分にも。うんざりである。

「……」

私が黙っていると、ずっと黙って水をちびちびと飲んでいた比企谷が、

「お……、……」

ぼそぼそ、と男に何かを耳打ちした。

「なっ……」

面白いくらいに顔が真っ青になっていく男。

「……いい、いやー、あはは、ちよつとトイレ行つてくるわー」

急に様子を変えた男に、険悪な雰囲気を漂わせた彼女達。

気まずいムードのまま、合コンはお開きとなった。もうあの女達と話すこともないだろう。

「あんた、何したん？」

「何つて、どういう」

目的もないままずると比企谷と行動を共にしている。繁華街はもうすっかり夜らしい雰囲気となっていた。

「あの男。なんかぼそぼそ言つてたっしょ？」

「ああ、あいつ。あいつな、彼女いるんだよ。その彼女つてのが俺と一緒にのサークルだな、言いつけてやるぞーってちよつくら脅してやった」

これだからリア充つてやつは、と彼は肩をすくめた。同時に暗い笑みを浮かべる比企谷は完全に見た目悪者である。

「そうだったんだ……てかヒキオがサークルとか受けるんだけど」

「俺だって一応奉仕部の一員だったんだがな……文芸部だよ。一日中本読んでるだけの、つまらんとコロ」

「そういうわりには楽しそうだけど」

「ほっとけ」

ふいつと顔を背けるが、比企谷の耳は赤い。

「お前は？テニスとかしてんの？」

「……いや、あーしの大学そんなに活発じゃなくてさ」

中学生の頃は、毎日がテニス中心で回っていた。

高校生の頃は、毎日あのグループでワイワイしてるのが一番楽しかった。

今は、どうなんだろう。

何も変わっていない？それは嘘だ。

過去にこだわりすぎて、大事なものを沢山置き忘れてしまった。

「ヒキオ。飲み直すぞ！」

「は?!俺はこう見えて忙しくて」

「なに、あーしの言うことが聞けないってわけ？」

「……くそ、さよなら俺の休日」

けど変わったことは一つだけある。

このよくわからない男と話しているのは割と楽しいということがわかった、それだけだ。

あーしさん、偶然とは恐ろしきかな

「は……？」

記憶はない。気づけば朝で、自分のではないベッドの上にいた。

(……服は、着てる)

体に違和感もなく、おそらくそうだったことはなかったようだ。

昨日は何をしていたっけなと思いつくと、そうだ。合コンで不愉快な思いをして、んで比企谷を強引に飲み誘って……。なるほど、やけに自分が酒臭いわけである。

「おい、そろそろ起き……てるな」

「なんであーし、あんたの家いんの」

「お前が酔い潰れて仕方なく、だ。……言つとくが、俺にそんな甲斐性はないからな。勘違いはしないように」

似合わないエプロン姿で、比企谷は部屋に入ってきた。ドアの向こうからいい匂いがするので、朝食を作っていたようだ。

比企谷に構わず部屋をキョロキョロと見渡す。本棚が多く、色気のない部屋だ。

「おいおいちよつとは遠慮してくれよ恥ずかしいだろ」

「キモイ……」

「ガチトーンのキモイは流石に傷つくんだが……」

軽く身支度を整えて部屋を出る。廊下はひどく物が多い。なんなら段ボールやら紙屑やらも落ちてている。だがそれはつい最近のものであるらしい。ほこりをかぶっている様子ではなかった。

「簡単なものだけど、ほら」

比企谷が出してくれたのは、白い炊きたてのご飯にシジミの味噌汁。なんと鯖の塩焼きまでついて、私からすればなんとも豪華な朝ごはんであった。

「やるじゃん、ヒキオ」

「ありがとよーい」

「……何から何まで、その、ありがとね」

私からすれば、顔から火が出るような思いで礼を言ったのだが、比企谷は昨日かけていたのとは違う黒縁のメガネの奥の目を見開き、

「いや、なんだ、まあ、気にするな」

ポリポリと後ろ髪をかくのがやけにおっさんくさい。

「しおらしい三浦なんてなかなか見れるもんじゃねえしな。いいもん見れたからいい

わ

……カッチーン。

「どういう意味だし」

「あーこの鯖うまいなあ」

「……………」

「おい指を鳴らすな、チキンな俺の心臓くらい止まっちゃうぞ」

「気使う気も失せんだけど……ん？」

もしかして私に気を使わせないために馬鹿なことを言っているのだろうか。

(こいつ損してるんだろーなあ、いろいろと)

久しぶりのおいしい朝ごはんをあつという間に食べ終え、気になっていたことを聞く。

「ねえ、あんたって引つ越したばっかなん？」

「あー、廊下とか散らかってただろ。3年に上がるタイミングで引つ越そうとしてたんだけどな、先延ばしになってつい昨日荷物運び終えたんだよ」

「昨日……あー、そーいやあーしの家の向かいで昨日引つ越しやってたわ。偶然もあるもんだね」

「5月って半端な時期だからな。珍しいんじゃないかねえの……あ、そろそろ大学行かねえと」

時間を見ると、気付けば起きてから結構な時間が経っていたようだ。

「あーしも行かなきゃ……んー、でもお風呂も入ってないし、今日はサボるかな」

「そんな軽いノリで決めるなよ……」

「オンナノコにとっては大事なことなんだよ、覚えときな」

「それはどうも。使う機会がねえな」

比企谷はテキパキと食器を片付けていく。私も手伝おうとしたが、人の家のことなので自分の身支度を整えることにした。

けれど、荷物が多いのでひどく邪魔くさそうだ。彼は自覚しているのかどうか知らないが、存外感情が表に出やすい。

「ねえ、あーし、片付け手伝うわ」

「は？いや、なんか悪いからいいわ」

「あーしがいいって言ってるの。お礼したいし、昨日の」

「気使わなくていいって……」

「そりゃブーメランっしょ」

タジタジとしていた比企谷だが、やはり予想通りにこちらの提案を渋る。こういうや

つにはこつちから強引に行かないと暖簾に腕押しである。

「ほらメアド。気付いたら片付いてたとか許さないし」

「さらつとメアド交換とかすげえな。……ほい」

比企谷は真新しいスマホをぽいっと寄越した。

「なんの銜いもなく渡せる点は評価するよ」

「そりやどうも。見られて困るようなものは入れてねえしな」

ポチポチと自分のアドレスを入力する。本当に登録件数の少ないこと。さぞおモチになられるのではないかと思つたが、見目が良すぎて近寄り難いのだろうか。そう思えば納得できる。

「ほれ、できたし」

「おう、まあ…助かるわ。そろそろ家出るぞ」

「了解」

比企谷はひどく身軽な格好だった。こんなので大学に行けるとか、男は気軽でいいなあとしみじみ思う。

玄関だけは片付いていた。というか靴がない。ファッションに興味が無いのだろうか。そういえば今日着ているのも、昨日と似たような服だ。

「ヒキオ、お洒落とか興味無いの？」

「実家にいた時は小町がいろいろしてくれてたんだがな。服はほとんど置いてきた。おく場所ないし、面倒臭いし」

おそらく最後のが本音だろう。彼らしいといえれば彼らしい。比企谷のことはほとんど何も知らないのに、なぜかそう断言できる。

「今度あーしが見繕ったげるわ」

「やっぱオカンだな、お前」

「オカンって何だし……」

きちんと並べてくれていた私の靴。オカンはお前の方だろと言うのは黙っておいた。

「つてここあーしの家に向かい……?」

「はあっ!?!」

「どうやら昨日の引越しは比企谷であったようだ。

「いや、どんな偶然……つて、お前何笑ってんの」

「はあ?!笑ってないし!」

「すみません……」

あーしさん、もやっとする？

比企谷が私の家の向かいに引越してきて、1週間が経った。

かといって私の日常が大きく変わることは無かった。

変わったことといえば……

「なんでまたいるんだよ」

「別にいいっしょ。それともなに、ヒキオ彼女でもいるわけ？あーしがいたら困んの」

「いや、いねえけど……」

すっかり片付いて綺麗になった比企谷宅。なんとなく居心地の良さを感じ、すっかり私は比企谷の家に入り浸っている。

かといって比企谷と会話するわけでもなく、延々とケータイをいじるときもあれば適当な小説を借りて時間を潰す時もある。高校時代の自分からは考えられないような時間を使い方だ。無理にでも会話をし、相手と同じことをし同じ時間を共有することこそが『楽しい』のだと決めつけていた。今はどうだろう。きつと高校時代の私が見たら、「何が楽しいの？」とかなんとか言いそудだ。これもきつと、私があ頃から変わったと

ころなのだろうけど。

今日は日曜。どちらも大学は休みで、私はやはり1日比企谷の家に入り浸る気である。

比企谷は私がいなくても特に気を使う様子はなかった。簡単に言う気と気を抜いて、無精髭を生やしたまま、ゴムのゆるんだスウェットをだらしなく着ている。視力はひどく落ちたらしく、眼鏡は手放せないらしい。椅子に座り小説を読んでいる姿はなかなかかくなっている。

かくいう私も、同世代、しかも男の前で見せるには気を抜いているのは事実だ。化粧は最低限で、服も適当に選んできたもの。比企谷のことは恋愛対象としては見ていないし、それはきつとお互いであると思う。

ちらりと、テレビの横に置かれた写真立てを見た。

雪ノ下雪乃、由比ヶ浜結衣。

彼女らと比企谷が、3人だけで撮った写真。卒業証書を持って、顔を涙でぐちゃぐちゃにしながら笑っている、そんな最低で最高の写真。

風の噂で、雪ノ下雪乃は日本最高峰の大学へ進学したと聞いた。学年首位を終ぞ誰に

も譲らなかつた彼女なら当然の結果だったのかもしれない。

結衣は東京に出た。頑張つて勉強していたのを近くで見えてきたから知っている。

『ヒッキーやゆきのんと同じ大学は無理かもだけど、あたしだつて頑張れるんだつてとこ見せたいの』

恋する少女は強かつた。みるみる成績を伸ばし、見事希望通りの大学へ進学した。

雪ノ下雪乃も、きつと比企谷のことを好きだつたのだろうと思う。これは全くもつて根拠のないことだが、強いて言えば女の勘だ。

比企谷はあんなに可愛い子2人から思いを寄せられていたことを知っていたのだろうか。

「何見てんだよ」

「あー、写真あつたから。懐かしいし」

「……そうだな、しばらく会つてねえからな」

比企谷は私の様子に気づいていたようだ。写真の方にひどく優しい目を向ける。

もう時効だろうと思ひ、思い切つて聞いてみることにする。

「どつちかに告られたりとかした？」

「ぶはっ!!?おま、なんでそれを」

「凶星とか……そんで、断ったんだ」

予想通りの狼狽っぷりに呆れてしまう。

「仕方ないだろ……俺はあのふたりのことをそういう目で見てなかったんだから」

「へえ、2人から告られたんだ」

「やだ三浦さんったら策士……俺のバカ」

「てつきりヒキオは雪ノ下さんと付き合ってるのかと思つてた。結衣からヒキオの話聞かなかつたから」

「雪ノ下か……俺はあいつが好きだつたんじゃなくて、憧れてたから。由比ヶ浜もそう
だ。俺や雪ノ下とは全く違う性格で、そういう風にものごつを見れるのかつて、なんて
いうの、うん、不思議な感じだつた」

「付き合つてみりやよかつたのに」

「ほかの人間だつたらそうしたかもな。けど俺は、あいつらには本心で接したいつて
思つちまつたんだよ」

悪いことしたけどな、と彼は細い眉を顰める。

「そ、そつか」

なるほど、あの二人はいい男を好きになつたものだ。

「あんた、意気地無しだね」

「なんだよ……」

「けど、あーしはそれでよかったんじゃないって思うし」

「はじめて肯定されたわ」

「あーしがあいつを否定したかったからさ」

あいつ？と首をかしげる比企谷を横目に、私は葉山隼人のことを思い出していた。

『俺は誰も選べない、選びたくないんだ』

考えてみれば比企谷も二人の女の子を振ったし、彼らの行動の結果は同じであった。

けれど、比企谷はちゃんと選んだのだ。

なぜか私にとって、それはちよっとだけ嬉しいことだった。

不意に、比企谷宅のチャイムが鳴る。

「誰だ？小町かな」

様子を見るに住所を教えるような相手はいないらしい。罪深いほどにシスコンな彼は、心持ちウキウキとした様子で玄関へと向かう。

（比企谷の妹って、あの生徒会の子か）

二つ年下の、全く似てない比企谷の妹は確か生徒会選挙で当選していたと思う。明るくて可愛らしくて、なるほどこういう妹がいたら溺愛したくなるのもうなずける。

がちやりとドアを開ける音がし、同時に

「ひ、比企谷……その、あの」

「はーちゃーんーん！」

「きゃっ！け、京華！ごめん比企谷！」

「け、けーちゃん!?それに、……」

「ああ？川崎？」

つい飛び込んでしまった。

青みがかかった黒髪にだるそうな目付き、不良のような行動の、私とどうしてもそりの合わなかった女。

川崎沙希。

「なんで三浦が比企谷の家に……！」

ギロつと持ち前の目つきの悪さを最大限に活かして睨みつけてくる川崎。

どうしてか、大学に入ってからには特に揺さぶられることのなかった私の精神は、今最大級に最高級に揺れて揺れて揺れて

……なんでだし？

あーしさん、癒される

「……」

「……」

なぜだかわからないがこの女……川崎沙希が比企谷の家に来訪したことに私はひどく動揺している。

それだけではない。

高校時代からまったくもって気の合うそぶりはなかった。

(こいつには負けたくない)

何を巡って勝ち負けを争っているのかは、現状よくわからないけど。

「いや、家主放つといてなに見つめあっちゃってんの。素直におしゃべりできねえのお前ら……」

「はーちゃん！これがしゅらばってやつでしょー？おにいちゃんが言ってた！」「そーかそーかけーちゃん、毒虫は本当に尽く余計なことをするな」

「で、なんでお前俺の住所知ってんの？」

川崎に似ているような似ていないような、しかしひどく可愛らしい女の子……京華というらしい……を膝にのせたまま、比企谷は川崎に質問した。すごく怪しい絵面である。

私は川崎に遠慮して家に帰ったりなどはしない。今日は一日中こいつの家でゴロゴロすると決めていたのだから。私が意思を曲げる理由にはならない。

「小町に聞いたんだよ……けーちゃんが比企谷に会いたって言うし、あたしも……いや、なんでもない」

「小町いいい!!? そうだと思ってたけどさあ!!? マイシスターよ、兄は悲しいぞおおお」

比企谷は妹がさらりと兄のプライバシーを侵害したことに悲しんでおり、川崎が最後

川崎は顔を真っ赤にしたり真っ青にしたりと忙しない。がくがくと比企谷の肩を揺さぶる。なぜか京華にまったく被害が及んでいないのは、彼女の京華への愛がなせる技なのかどうなのか。

「お、お、おちつ、おちつけかわさ、き、おげえつ」

「はーちゃんもさーちゃんもたのしそー！けーかも混ぜてー！」

この幼女はなかなかの大物になりそうだとふと思った。

「ああ、そうか……付き合ったりじゃなかったんだ……」

「なんでお前そんな焦るんだよ……」

「ヒキオって馬鹿なん？」

「それに関しちやあんたに賛成するよ、三浦」

鈍いのか鈍いふりなのかは定かではないが、こうやって奉仕部のふたりの好意をふらふらと躲していたことは容易に想像がつく。

「そうだ、今度の教育実習総武高なんだってね」

思い出したように川崎が切り出すと、比企谷はどんよりとひどく嫌そうな顔をした。

「やめろよ……平塚先生にこきつかわれること間違いなしなんだぞ……国語科だしな」

比企谷は国語ができる、と結衣から聞いたことはあった。なるほど、国語が得意な人種には見えないが。

そうして教育学部で同じ大学にしかわからないようなことを話されては、こちらは傍観するしかない。のけ者にされたようで私としては面白くないが……。

「おねーちゃんは、はじめましてのひと？」

「ん？そうだね、京華ちゃんとは会ったことないし」

こちらにも退屈したのであろう、川崎京華が比企谷の膝から脱出し、こちらにとてとてと歩いてやってきた。

じっくりと見れば見るほど川崎とは真反対の雰囲気であるが……この子は擦れずに育って欲しいものである。

「けーちゃんはね、かわさきけいかっていうの！おねーちゃんは？」

「あーしは三浦優美子。はじめまして」

「ゆみこ、じゃあゆーちゃんだ！ゆーちゃん、ゆーちゃん！」

(……………可愛い……………)

スキンシップが好きなのだろう。人に遠慮なく甘えられるのは妹の特権なのかもしれない。私の膝に乗ってきて、「あーそーぼー!」とはしゃいでいる。

これではあの不良っぽい川崎が可愛がるわけだ。

思えば自分は小さい子を好きなのかもしれない。高二の夏に平塚先生に誘われて行った小学生とのキャンプでも、彼ら彼女らの相手をするのは苦ではなかったように思う。

「ゆーちゃんはなにしておそんでくれる?」

「んー……なんかしてあげたいけど、この家なんもないし……かといってあーしの家も小さい子が遊べるような物無いし……あ! お絵かきする? けーちゃんは、お絵かき得意?」

「けーか、お絵かき好きだよ!」

「そつか! じゃあ……ヒキオ、紙とペン借りるよ」

「お、おお」

「これがたいちゃんで、これがさーちゃん」

京華の幼い手が、この年頃の子にしてはなかなか上手な絵を描いた。たいちゃんというのは比企谷妹の同級生で、京華の兄らしい。

「上手じゃん！で、こっちがヒキオ？」

「ひきお……？はーちゃんだよ？」

きよとんとめをばちくりとさせる京華には通じなかった。それもそうである。

「は、はーちゃんね、うん、はーちゃん」

何だか気恥しいものを覚える。比企谷も何事かこっちを見ている。あっち向けよ……。

「でね、これがゆーちゃん！」

「け、けーちゃん……ありがとおおお！」

「わ、ゆーひゃん、おむねがくるしいよ」

ぎゅむーつと京華を抱き締める。あーなんて可愛い子なんだ。川崎の妹じゃなかったらお持ち帰りだし。

京華の描いた私は、ちよつとむすりとした表情をしている。

こんなつまらなさそうな顔して、京華と遊んでたのかな、私……

「ゆーちゃんはね、さーちゃんとはーちゃんがお話してるとこんな顔してるんだよ」
違うんかいいいいいい！

って待って。それじゃ私が川崎に嫉妬してるみたいじゃん？それはないって。

「け、けーちゃん……」

愕然とした顔の川崎。私だって多分同じような顔をしているはず。

「なんだ三浦、疎外感でも感じてたのか？」

「ヒキオ、いっぺん死んでこい」

「あんたって……どうしようもないね」

あーしさん、一念発起？

比企谷は部屋の隅でのの字を書いている。相手にされなく寂しいのだろうが、ひかえめに言っても気持ちが悪い。

「なあ川崎」

「……………なに？」

私は膝の上ではしゃぐ京華を見下ろしつつ、彼女に聞いた。

「……………あーしって、今からでも……………、…なれっかな……………？」

「……………三浦が……………？」

川崎は笑うことはしなかった。ひどく驚いてはいたが。

またねー！と大きく手をぶんぶんと振る京華と、夕日のせいか若干赤い顔で小さく手を振る川崎を見送った。

「結局こんな時間だな」

川崎姉妹の来襲からすでに5時間。6月とはいえすでに夏に差し掛かっている今日このごろ、日が暮れる前特有の蒸し暑さで汗が出てくる。

「ちよーお腹減ったんですけど」

「小さい子相手にするとエネルギー吸い取られるもんな」

「確かに」

「けど、楽しそうだったな、三浦。ここ最近で一番に」

「なっ……！」

比企谷はひどく愉快そうに笑う。

「うざいし。キモイし。生意気だったの」

「へーへー」

見透かされているらしい。この男のことを以前存外に分かりやすいと評したが、人のことを言えないようだ。

少しだけ、世界が綺麗に見えるかもしれないなんて。

京華の笑顔を思い浮かべながら、そう思うのは私らしくないんだけど。

「川崎は相変わらず所帯染みてんな」

作りすぎた（のかは怪しいものだが）らしい川崎沙希作里芋の煮物は、味がしみていて美味しかった。

「おいしい……」

「だよなー、おふくろの味つつーか。まあ俺のおふくろの味は小町の料理なんだが！ マイエンジェルの料理は世界一いいい！」

「聞いてないし……」

川崎は知るはずもないがこいつの胃袋を掴める日は近いようだ。比企谷の箸は休まることがない。

まともに料理をしたことはない。

弁当を作るといったって、冷食のオンパレードだし。自分で作ったとは言いがたい。こんなに伸ばした爪ではゆで卵をむくことも出来ないかもしれない。いや、多分できないだろう。

料理をしようと思ったことはある。将来的に絶対必要なのだと、頭では分かっていた。けど、目標がない。自分のためだけに料理するのはひどく億劫だし、これで恋人でもいればまた違ったのだろうか。

一瞬、比企谷とぼっちり目が合った。

「……いつぺん死んでこい」

「理不尽じゃね!?!」

……そういえば、

(男に手料理っぽい手料理ふるまったのって、あの時からなのかな)

思い起こすは生徒会主催バレンタインイベント。雪ノ下雪乃に教わって、隼人にチョコを食べてもらったっけ。

まあ自力とは言いがたかったけども。

目の前で綺麗な箸使いで里芋を食べる男を見る。

「にんじんもうまつ!」

「……なんかイライラするし!」

「おいやめろ！俺の食糧が!？」

「ヒキオ！」

煮物を片っ端からぶすぶすと取ってやる。感情のままに出た言葉の先を、なぜか比企谷はちゃんと待ってくれた。

「……………どした？」

「…あーしが、料理って……………変、かな？」

『ねえ、隼人』

『どうした？』

『あーしが、料理するのって、どう思う？』

グループの誰にも聞かれたくない。そう思って隼人と2人きりのときに聞いてみた質問。

隼人ならこう言ってくれる。私は期待して、その期待は私に返ってきた。

『いいと思うよ、頑張れ』

けれど結局、私があがままに期待していた言葉はなかった。

「正直想像出来んな」

比企谷はあっさりと言って切った。

「似合わないっての？」

「いや、うーん、まあ確かに。現状のお前から料理なんて連想はできん」

けどな、と比企谷は続けた。

「お前が努力したものだったら、俺は食べてみたいと思う」

由比ヶ浜ほどひどくなければな、と比企谷はしかめ面をつくった。

「そっか……」

胸にすんと落ちてきた言葉に、知らず知らず頬が緩んでしまう。

「じゃあ、今度、がんばってみるし」

「おう、木炭はごめんだぞ」

「なめんな、川崎より上手くなってみせるし」

「そりや道は長いな」

「あーしがやるつつつたらやるの」

川崎沙希への対抗心がなげ生まれたのかは分かんないけど。

私には、変わろうともがける力が残っていたらしい。

あーしさん、ガハマさん、愚腐腐さん

お風呂から出て、あたしはぼうつとテレビを見ていた。特に面白いとも思わないが、一人暮らしには少々広すぎる部屋でいるとたまに寂しくなるのだ。バラエティーの空虚な笑い声は余計気分をもり下げるんだけど。気分を変えるためにちよつとお酒をたしなむ。美味しいなあ、そうだ、今度カレーにいらしてみようかな！りよーりしゅ？つてやつ！ピーチサワーなんてどうだろ？桃は美味しいからきつと大丈夫だよね？

ユーガツタメル！

「ありや、誰からだろ？」

最近になって、高校生の頃から使っていたケータイとはおさらばした。機能が增えずぎて、あたしにはまだまだ使いこなせない。

「あれ、優美子……？どしたのかな」

家ではもっぱらコンタクト。コンタクトの方が目が痛くなったりなどの弊害はあるけど、やっぱり、ね。外と中は区別しときたいから。

大学もやっぱり楽じゃない。高校生にくらべたら大人……なのかな。大人ぶってるだけ、タチが悪いのかもしれない。そういう私も大人ぶろうとしてるのかもしれないけど。

ふと、忘れられない記憶が蘇る。

私の罪。腐った目の彼。

(どんな大学生活送ってるのかなあ)

逃した魚は大きかったかな。彼とはなかなか波長が合ったのに。

ユーガッタメール!

「ほよ? 誰かね誰かね」

私のケータイがなることは少ない。あつて同人誌仲間との連絡とか、そのくらい。

「おー、優美子じゃん。どしたんだろ」

「料理を教えて欲しい???」

ひさびさに集まった、懐かしき高校時代のグループ（ただし女だけ）。

結衣も海老名も、見るたび可愛くなつていつてる。男の気配がないのは相変わらずだけれど。

そこそこ有名な喫茶店で、馬鹿みたいに甘いコーヒーを啜る。

「う、うん……あ、結衣はあれだから、味見とかしてくれたりいいし」

「ひどいよ優美子!?!早速信用ないし!」

「賢明な判断だね」

「海老名は？料理……得意なん？」

「まあそこそこには。優美子を見るからにやったことなさそうだしねえ。……好きな人でもできた？」

「ゲホツ!？」

相変わらずの洞察力である。私がわかりやすいだけなのだろうが、高校時代から海老名にはこうやって見透かされてばっかりだ。

「ほえええ……優美子、乙女じゃーんー応援するよ、あたしー」

「いや、そーいうんじゃ……」

大きな目をキラツキラさせている結衣。ついでに大きな胸もゆれて……あ、今チラツと見た男。わりとあからさまだし。結衣は鈍いから気付かないけど。

不意にむすくれた表情の男の顔が浮かぶ。

結衣は、その……比企谷に振られているとは、いえ、彼のことが好きだったのだから。拒絶されてもおかしくない。

「あんさ、結衣……それに海老名も」

隠しておくのは性に合わないので、ここ一週間ほどであったことを打ち明けることにした。

「そっかあ……ヒツキー、元気してるんだ」

全部話し終えたあと、結衣の反応は思っていたのとはちよつと違うかった。

「ヒキタニくんか、懐かしいねえ。……まさか、優美子がヒキタニくんのことす」

「待て待て待て待つし！好きとか、そーいうんじゃ、ないこともないこともないこともないけどー！」

「いち、に、さん、よん……否定してないよ優美子!？」

「あいつが、あーしが料理作るんだつたら、食べてみたいって言ったから、しゃーなしで作るんだし」

そーかそーかーと返ってくるのは適当な相槌。結衣も海老名も私の言うことは聞い

ていないようだ。

「ヒツキー、あたしが料理するっていつでも頑なに食べようとしてくれなかったんだよー」

「んー、結衣の場合はヒキタニくんの生存本能というか、防衛機制というか、ねえ」

「そんなことないし!? 姫菜ひどいっ」

けらけらと海老名は楽しげに笑う。結衣は反応がいいので、いじると楽しいというの
は分かる。

「ね、優美子。あたしき、ヒツキーのこと好きだったけど、うーん、今でも好きかも
だけど、優美子のこと、応援したいって心から思ってるよ」

「同じく、だよ。優美子頑張れ〜♪」

「やっぱ、…あんたらに相談してよかったし」

あーしさん、自覚しちゃう!

今日は私の家で、海老名に料理を教えてもらうことにした。結衣は……改めて考えれば不要な人員だったかもしれない。まあ、この三人でいる時間が好きだし、私的には全然構わないんだけど。

「でさあ優美子、何作るか考えてきた?」

海老名に良く似合う、シンプルだが可愛いデザインのエプロンだ。妙に様になっ
ていて、料理慣れしているのだと伺い知れる。

「んー…詳しいわけじゃないから、あんまり」

「そっか。ならヒキタニくんの好物は?」

「そーだよ! ヒツキーの好きなもの作れば良くない?」

なるほど、……まあ? あいつのために料理するわけじゃないから? でもまあ食べてみたいって言ってたし? それならあいつの好きなもの食べさせてあげるってのも悪くないかもね??

「優美子……」

「考えてることわりとわかりやすいの、変わんないね。顔真つ赤だし」

「うっさいし！でもなあ、ヒキオのやつが同じものずつと食べてるとこ、見たことないし」

「ヒツキーの好きなものってなんだろうーね。MAXコーヒー？」

「結衣、それ料理じゃないよ……。とりあえずヒキタ二くんが甘党なことが判明したから、甘めの味付けの料理にしよう！」

「甘い……あ！あれは？肉じゃが！ママがいつばいお砂糖使うのよーって言ってた！」

肉じゃが。

いや、なんか狙いすぎじゃない？それは海老名も思ったことらしく、苦笑しながら「なんかあざといよね、……ヒキタ二くんが隼人くんに肉じゃが作ってあげるみたいな展開はないの!?あざといヒキタ二くんに我慢ならなくなつた隼人くんが肉じゃが食べて肉食系に……!」……ほつとこ。台所というところで鼻血を我慢してくれただけマシだ。

そういや、この間川崎が持つてきた煮物を比企谷は大変おいしそうに食べていた。あれは確か里芋の煮物だったような。甘めの味付け……やっぱあいつ狙つてやつてるん

かな。川崎はどうも気に食わない。…私ができないことを涼しい顔してやってしまうから。

「里芋の煮物にする」

「へ？」

「またなんか地味な……」

「ほっとけ！」

そりゃ川崎よりは美味しく作れないだろうけど。それはキャリアの差だから。負け試合だろうと、同じ土俵で勝負しない理由にはならない。

めずらしくパソコンをガチャガチャやって画面とにらめっこしていた比企谷は、私に手に持つ鍋を見た途端だるそうにしてた目をほんの少し見開いた。それこそ、注視してなければわからないくらいだけど。

何も言わずにきばきと食事の準備を整えていく比企谷に、なぜか私の頬の筋肉はだんだんゆるんでいってしまってる。おい、言うこと聞けっての。そういうんじゃないから。

「手伝うか？」

「あーしがつから、座ってて」

食器やらなんやらを運んでいると、不意に比企谷がそう言ってくる。普段なら手伝ってもらうんだろうけど、今日はまあ、自分でやってあげたい気分だった。

「あつ……ご飯炊き忘れてた！」

「炊いてるぞ」

「は？」

「……どうせ今日も来るだろと思ってな」

「そ……………」

比企谷、あざといし。

「んじゃま、いただきます……」

「ど、どうぞ」

私が鍋の蓋をひらくのに躊躇していると、「なにもったいぶってんの?」とからかうように言われた。なんだこいつ、果てしなくうざい。

「里芋……。なんだ、川崎の食べて気に入ったのか?」

「デリカシーなさすぎ死ね」

「おい、鍋の蓋で殴るな理不尽だろ……。てか、なんだ。き、器用だな?」

褒め言葉にしてはひどく不器用で、つい笑ってしまった。比企谷は褒め言葉すら捻くれてしまうらしい。

「なにそれ、褒めてんの」

「いや、初めてだろ？美味しそうだぞ、見た目には」

「全部自力じゃないけど、……とりあえず、最後の一言余計だし」

「それにしたってだよ」

海老名に手伝ってもらったけれど、やはりそこは初心者の私。要領の悪さはそこかしこに滲み出していて、こうして比企谷を前にすると鍋をひっくり返して全てなかつたことにしたくなる衝動に駆られる。脳裏にちらつくのは川崎の作ってきた、いまの私の目指すところである煮物。比企谷はきつと気にしないんだろうけど、私は気にするし。

けど褒めてもらってもはや浮かれちゃってる。私ってチョロいよね、知ってたから。

びよいびよいと相変わらず綺麗な橋の使い方できりわけていく。結衣は作るのはいだけど味覚は信頼出来る。海老名も「おいしいよ！自信もっていいんじゃない？」って言うってくれたし。

大丈夫、だとおもう。

なんなん、比企谷の顔みたらなんでこんなに弱気になるかな!?

「お、おい三浦!俺のぶんの煮物が……!」

「はっ!?!、ごめん」

やけ食いならぬやけ取りを無意識に行っていた模様。このごちゃごちゃした精神を

どうにかしたくて、ぱちんとわざと大きな音を鳴らして手を合わせた。

「いただきますっ!」

「いただきます……」

じいじいといつと比企谷を見る私。居心地悪そうにしながらも、煮物を口に運ぶ比企谷。あ、喉仏がごくんつてなつて男っぽい。じゃないだろ私さんよ。

「……」

むぐむぐとご飯とともに何口か食べる。良かった、一口目でおええええまじいとかわれなくて。

「……」

「……なんだよ」

「わかんでしょう……どう?」

とぼけているのか本気なのか。少なくとも本気で私の視線の意味を図りかねている様子ではなかった。

「それとも、感想聞いたらダメなん……?」

「い、いや。……ふつーにうまくてだな、コメントに困るっていうか」

「へっ?……あ、ああ、そうなん……」

「お、おお」

がしがしと後ろ髪をかく仕草は、最近私にも移ってしまったものだ。ふたりして髪を搔きながらそつぽをむくという謎空間が形成される。

なんか、美味しいって言ってもらえるのって……いいもんだ。そりや、今日の煮物は六割、いや七割、いや六割四分くらい海老名に頼ったものだけだ。だからきつと私はちよつとだけ喜びきれない。

それでも、大きな一歩だと……自惚れてもいいのだと思う。

「……俺としては、もうちよつと甘いのがいいから、七十三点」

「う、何その若干辛い採点」

「次は、あと一キロくらい砂糖入れろよ」

「……っ！ヒキオが病気で死ぬくらい砂糖入れてやつから」

「おう。精進しろ」

にや、とやっぱり底意地の悪い笑顔を浮かべる。

次なんて、そんな事言われたら勘違いしてしまいそうだ。

これはもう、認めてしまおうしかないのもしれない。私の中のこのモヤモヤがなんなの

か、
を。

番外編：あの日あの時あの場所で

高校生活における目標

1年J組 鶴見留美

私の人生は、ある人に出会ったことで百八十度とはいかずとも百五十四度くらいは方向転換した。

私は小学六年生のとき、クラスの子達から嫌がらせ……いじめに分類されるようなことをされていた。当時の私は彼女らをバカみたい、子供っぽいと評していたが、蓋を開けてみれば自身のつらい、さみしいという感情に蓋をして格好つけていた。私も十分子供だった。

そんなとき、私は目の腐った年上のお兄さんに出会った。

彼は凡そ普通の感性を持った人間には考えもつかないような突飛な行動で、私と私の周りの状況を一変させた。正直あの方法は引いた。感謝しているが、あんな手段ばかり彼が選んでいたら、彼は壊れてしまうかもしれない。

だから私は、彼を助けるなんて傲慢なことと言わないけど、助けられたお礼ができるくらいに強くなりたい。

まずはあの黒髪の美人さんが所属していた国際教養科に頑張つて入った。
これは通過点だ。

八幡に今度あつたとき、頑張つたなつて言つてもらえるように頑張るのが、私の高校生活においての目標。

「鶴見、まずは入学おめでとう」

「ありがとうございます、独身先生」

「平塚だ！……まったく。しかし、元氣そうで何よりだ」

入学して初めての現代文の授業。担当が見覚えのある美人な先生だったことには驚いた。彼女も私のことを覚えていてくれたらしい。

平塚先生は、「君たちのことを詳しく知りたいのは山々だが、時間もない。代わりにこれを宿題として書いてきてくれ」と早速私たちに課題を課した。

私は正直にありのままを書いたつもりだったが、なぜか早速職員室にお呼び出しされ

てしまった。いい出来だと思ったのに。

「けど、私の作文にどんな問題点があったんですか」

「いや、なんとさえばいいのか。問題点はないよ……君と話がしたくてな。比企谷に助けられた、という人間は私個人的に見れば多いのだが、どうも彼はひねくれた行動ばかりとるものでね。彼に助けられた人間は大抵その事実を認めようとしない」

平塚先生は肩をすくめた。困っているようで、その実樂しそうにしている。

この人は八幡のこと、理解しているんだなと安心した。

よかったね、八幡。ぼっちじゃないみたいだよ。

「私は、彼のとつた行動は最低だと思えますよ」

「ほう?」

「けど、八幡のおかげで新しい友達ができた。明日学校楽しみだなんて思えるようになった。だから私は八幡に救われたの」

「君のような子がいてよかったよ。彼は優しいんだが、捻くれが度を越していてな」

「その捻くれに救われたんだから、それも八幡の個性つてことです。私、懐は深い方だと自負してるんで」

そう私が言うと、平塚先生は堪えきれないとばかりに笑い出した。笑い方も男前だ。もうちよつと慎み深い感じで笑ったら……んー、ちよつと似合わないかも。この人は

かっこよすぎる。少なくとも八幡の次くらいには。

「君は比企谷にどこか似ているのかもしれないな」

「それはちよつと勘弁です」

「褒め言葉として受け取りたまえ。……うん、君の話は興味深かったよ。時間を取らせて済まなかったな」

「いえ、私も楽しかったです」

では、と言い席をたとうとしたが、平塚先生に引き留められた。

「ああ、待ちたまえ。鶴見留美」

「なんででしょうか」

「部活動、に興味はないかね？」

あーしさん、歩き出す。

ごろんごろんごろんごろんゴンツッ！

「いつつつつたああああああ!？」

あの日、……比企谷に再会した日以来の胸にくすぶり続けていたモヤモヤを『恋』と呼ぶことにした、それ以来。私はあいつの家に行つてない。

いや今までの自分見てみるよくそださいジャージでメイクもろくにせずひたすらごろん寝して干物っぷり全力アピールとか、いや、ほんとに、

「……………泣けてくる……………」

よじよじとスマホをたぐりよせ、いまだ返信出来ていない比企谷からのメールを見る。

『何かあったのか』

お前のせいだし!と言つてやりたいところだが、なんかこいつ心配してくれてんのかなんて考えちゃつたら、どう返信していいのか頭が真っ白になった。人生最大級に脳みそ回転させちゃつてる気がする。これで知恵熱でも出たら、……看病してくれちゃつたりして?」

「ぐふふ……はっ?!?!」

ホント自分ダメじゃんときさらに自己嫌悪に陥る。いつの間にか、私が自覚しないあいだに恋の病は重症化していたようで。こらえきれないニヤニヤを誤魔化すようにごろごろごろと転がっていたら、また私は足を打った。

「痛い………」

足も、自分も、痛々しい。

あの合コンの日以来気が進まず行くことがまちまちになっていた大学に私はいる。

いちおう講義を聞くものの、何を言っているのかさっぱりだ。2週間弱のブランクは伊達ではない。全く自慢にならないけどね。ノートを見せてもらおう友人もいないし、諦めるしかないようだ。

私が今日大学に来たのは、はなから興味の無い講義を聞くためではない。

ある人に会うためである。

比企谷の家に行く時はぺたんこの気の抜けたサンダルだったため、ひさしぶりのヒールがしっくりこない。大学ってこんなに気を張る場所だったのだと改めて思った。

まあ気を張ってないひともあるんだけど。

ゴンゴンと雑にノックする。そうでもしないとこの部屋の主はノックを聞いてない恐れがあるから。

経済学の若き教授、今川絵麻。親しくしているとさえ言えばなんだかやらしく聞こえるけど、この大学において唯一気を使わずに話せる相手だ。それが、たまたま教授だったというだけ。

経済学に魅了された人で、その道では有名らしいがこの大学においては生活力のなさで有名な人物である。教授室は専門の本やら雑誌で溢れかえっており、整頓という言葉

を知らない。運が悪いとドアを開けた瞬間にこちら側に書籍による雪崩が起きる。

やはりといえばやはりか、容貌にも無頓着だ。それでも人気があるのは本人の人徳ゆえか。……駄目人間だけだ。

「入っつていいぞー」

慎重にドアを開ける。なるほど、今日は大丈夫な日であったようだ。

「先生、久しぶり」

本当は教授と呼ぶのが正しいのであろうけれど、私は呼びにくいから先生と呼んでいる。彼女もそれを特に気にしたそぶりもない。

「三浦か。本当に久しぶりだな、そんなに私の講義は面白くないか？」

「だってあーし、経済興味無いし。先生の講義は、ちよつとだけ面白いけど」

「それは光栄なことだ。で、今日は何の用かな？」

メガネの奥の吊目が私を捉える。

やつぱりお見通しなようだ。学生と教授という関係だが、それ以前にこの先生は一人の人間として向かい合ってくれる。伊達に三年間向き合い続けたわけではない。

「先生、もうあーしが三年生つていうこともわかつてる。本当今更で馬鹿なことして

のはわかつてる。それでも……今からでも、なれっかな？幼稚園の先生ってやつに……」

「……そこに掛けなさい」

締まらないことに先生はわしやわしやと荷物をかき分け、重ねていた本を下ろし、ようやく椅子に座ることが出来た。

「そういうコトか。うん、お前も女だったんだな」

「先生に言われたくないし」

「いいんだよ、経済学が私の恋人だ」

化粧つけないが、年齢にしては若々しく見える。きっとそれなりの格好をすればあつという間に相手が見つかりそうだ。もう経済学というオトコに売約済みではあるのだけれど。

「私はお前の決断を肯定するよ」

「……意外。止められると思つた」

「人生これからがまだ長い。やり直しは効くものさ。しかし、わかつてはいるだろうが

……」

先生は言葉をつまらせる。

大学に入った当初から教育学部であった人間と、私は競争していかなくてはならない。周回遅れも甚だしい。どれだけ足が速くとも、どれだけ体力があろうとも、……どれだけ熱意があろうとも、ひっくり返せないモノが、そこにはある。

「……私もな、今の三浦と一緒だったよ」

なんとも意外な言葉がとびでる。ぼつと先生を見上げると、困ったような顔をして笑っていた。

「どういうこと？」

「私の場合、結局経済学の道から外れることは無かったんだがな。一度だけ、違う道に進んでみたいと思ったことがある。結果は見ての通りだがね」

「そうなん……」

なるほど、先生みたいな人でもそういうことはあるらしい。

「きつとこのままでも、お前はうまく人生をやっていけるぞ？ 断言はできないが、私は少なくとも、今の自分に満足しているから」

けどな、と先生はそのまま続けた。

「私は勇気のない人間だ。きつと今の三浦と同じように夢を抱き、そして現実を目の前

にして夢を捨てた。だから、お前のことを肯定するしか出来ないんだよ。お前を後押しするよな言葉を、かけることは出来ない」

肩をすくめ、そのまま黙り込む先生。

あー、なんだ？この違和感。このひねくれた言葉を並べ立て、自分の真意を隠すような物言い。

「あ、そういうことか」

「なんだ？」

「先生、あーしの好きな人に似てるんだ」

納得納得とうむうむ頷いていると、先生はなんとも微妙な顔をしている。

あいつだったらきつと「は？訳分からん」とかなんとか言うんだろう。

「あーし、なんかね。やつとやつと、ぼやけてても未来の自分を思い描けた気がするんだ」

そうだ、けーちゃんと触れ合ったあの短い時間。あれだけで？って人には言われるかもしれない。けど、人間なんてそんなもんだ。食パンくわえて曲がり角でぶつかって、それが人生を左右する出会いかも知れない。私にとって、あの子との時間はつまりそういうものだった。

「やつと、変わっていきそうって思った。これ逃したら、あーし多分後悔する」

「後悔か。きつと、どちらの道を選んでも後悔はするぞ？あとかされのない選択なんてない」

「屁理屈いうなし。あーしはきつと大丈夫だから、……先生に、応援して欲しいよ」

私がそう言うのと、先生はひどく驚いた顔だ。ぎゅうつと渋い顔をし、多分難しい理屈を並べているんだと思う。

「どちらも選ばないなんて、それは一番無責任なことだし。先生は勇氣はなかったかもしれないけど、責任のある選択をした。そんで、あーしは今先生に出会えたから、それでいいっしょ？」

ふんつと言いつてやる。

不意に隼人の言葉が思い浮かんだ。ああ、でも、あれは彼なりの選択の仕方ではあったのだろうか。私はすつつつつつとごく傷ついたけど。

けど、思い出すのが辛いことではなくなった。……かもしれない。

「どつちが先生かわからんな」

「やっぱあーし、向いてんじゃね？」

ひひひ、とわるーい顔で、きつと比企谷のがうつつたんだ、そんな顔で笑う。先生も

私につられたのか、くくくとなんだか男前に笑っていた。

「そうだな、経済学に取り憑かれた身からすると非常に辛いのだが、……がんばりなさい。また顔を見せに来るといいさ」

「単位はとらないと。卒業はするつもりだから。妙な経歴になるけどね」

「それもそうだな」

「んじゃあ、ありがとうね。先生」

「こちらこそ、と言うべきか。これから勉強漬けの毎日だな」

んぐうつ、とつつかれたくない真実に蛙みたいな声が出た。

けどまあ、目標のある勉強とはよいものだ。今までそんなこと、したことがなかったから。

ばいばい、と手を振り、教授室を後にする。

バタン。

「ふう……」

「なんか色々言っちゃったけど」

まあ、応援してもらいたい人に背中を押されたのだから。やるしかないのだ。

「あーしは、歩き出せるっぽいし」

とりあえずは、比企谷の家に行こう。
なんだか無性に会いたくなつて、……うん、やっぱり、足が痛い。